小説家

田渕靖章

人物

籠谷良平(27)アルバイト

中田孝介(25)学生時代の後輩

○アパート２０８号室・リビング(夜)

籠谷良平(27)、パソコンと向かい合い、白いキーボードを打ち込んでいる。

突然、両手でキーボードを叩く。

良平「駄目だ。カズ子の精神状態を描けない」

○アパート２階の廊下(朝)

良平、２０８号室の扉から出て来る。

歩いて階段の方へと向かうと、足を滑らせて倒れる。

小銭が周囲に散らばる。

良平「くそ！」

と、立ち上がり２０４号室の扉を蹴る。

しゃがんで、落ちている小銭を拾う。

手から血が流れている。

手を止め、その手を顔に近づけて、じっと見て黙り込む。

良平「そうだ。あの時のカズ子は心の傷によって痛みを感じないんだ。だとすれば……」

と、２０８号室の方へ走って引き返す。

○アパート２０８号室・リビング

良平、パソコンと向き合って勢い良くキーボードを打ちこんでいる。

手の血が白いキーボードについている。

良平「カズ子の心の傷が、怒りとなって指先の傷の感覚を麻痺させていた。それが大量の血を雄介の部屋に残してしまう事態を引き起こしてしまったのだ」

キーボードを打つ手を止める。

良平「完璧だ」

と、感動するような表情を浮かべる。

○アパート２階の廊下(夜)

中田孝介(27)、リュックサックを背負って、２０８号室の前まで歩いて来る。

インターフォンを押す。

○アパート２０８号室・台所(夜)

鍋の中でカレーが沸騰している。

良平、中田、その前で立に立っている。

良平、スプーンを中田に差し出す。
良平「これでルーをすくって俺の顔にかけてくれ」
中田「えっ！かける？」
良平「雄介の言葉によって、カズ子が受けた容姿に対する心の痛みを、感覚で取り入れるんだ」
中田、困ったように目を左右に動かす。
良平、スプーンを強引に中田に握らせ、カレーのルーをすくわせる。

○アパート２０２号室・リビング(夜)
良平の声「あちっ！あー。そういう事か！」
カレーのルーが顔についた良平、走ってやって来ると、パソコンの前に座ってキーボードを打ち込む。

○アパート２０８号室・台所(夜)
キーボードを打ち込む音がリビングの方から響いて来る。

中田、不安そうにリビングの方を覗く。
良平の声「自分の顔に吹き付けられた侮辱
という名の燃える炎。それが、少女の心の
中を焼き付き、存在ものを打ち消してし
まった……」
カレーのルーが沸騰し続けている。

○アパート２０２号室・リビング（夜）
良平、パソコンと向かい合ってキーボ
ードを入力している。
突然、キーボードを両手て叩く。
良平「駄目だ！」
と、両手を机につける。
良平「整形に失敗して外見的にも内面的にも
変り果ててしまったカズ子の姿を見て、弟
の幸平が心に受けた衝撃を描けない」
と、黙り込むと、何かに気づくように
視線を上げる。
良平「そうだ」
と、立ち上がる。

○アパート２階の廊下（夜）

良平、車のカギを片手に扉を開けて出て来る。

中田、良平に続いて出て来る。

良平、扉の鍵を閉める。

良平「さあ行こう！」

と、笑顔を見せてから、歩き出す。

中田「ドライブですか？」

と、ついて行く。

良平「実はドライブじゃないんだ」

中田「え？ドライブじゃない？」

と、立ち止まる。

○ボウリング場の駐車場（夜）

車はほとんど止まっていない。

白いセダンがエンジンをつけて、照明をつけて停車している。

その前で良平、中田、照らし出されるように立っている。

中田「何するんですか？」

良平「俺が出入り口に後ろ向きに立つ。そしたら、この車を走らせて、１００キロ以上の速度で俺を跳ね飛ばしてくれ」
中田「なっ、何言ってるんですか⁉」
良平「そうする事で弟の幸平が心に受けた衝撃を物理的に体感できるんだ。衝撃を形に、それは経験へ、そして文章へと変換され作品に魂を込めるんだ。さあ、始めよう」
と、背を向けて出入り口の方へ歩く。
中田「もうやめましょうこんな事」
良平、無言で離れて行くと、出入り口の方で背を向けたまま立ち止まる。
中田、呆然と良平を見続ける。
三十秒ほどが経過すると、良平、走って戻って来る。
良平「何してるんだ？早くしてくれよ」
中田「できないですよ」
良平、険しい表情を浮かべる。
良平「なんでやらないんだ！」
と、片足で地面を踏みつける。

中田「そんな事をしたら大変な事になりますよ。自分を見失ってませんか？」
良平「当たり前だろ！カズ子は生まれ変わる為に受けた整形手術に失敗したんだ！」
中田「いやっ、そっちじゃなくて」
良平「幸平も同じだ！カズ子の実の弟だぞ！」
中田「そうじゃなくって」
良平、一歩前に踏み出す。
良平「じゃあなんなんだ！」
中田「だから、あの……」
と、目を逸らして、少し黙る。
両手で握り拳を作ると、中田を見る。
中田「はっきりと言います。そこまでしなきゃ作品を書けないなら、才能がないって事ですよ」
良平、中田に視点を合わせず黙り込む。
少しすると、徐々に険しい表情に変わっていき、黒目が上まぶたに隠れた状態になり、中田を睨み付ける。
良平「やっとカズ子の気持ちが解ったぞ。カ

ズ子は最初から雄介を殺すつもりだったんだ」

と、視線を別の場所に移す。

良平「となると、後はこの作品最大の見せ場、雄介殺害後の佐山との逃亡生活中のカズ子の心理に全てがかかってくる」

と、中田を嬉しそうに見る。

中田、何かに気づいたように、良平から全力で走って逃げる。

良平、急いで車に乗り込む。

車、急発進して中田を追いかける。

○ボウリングの駐車場の出入り口(夜)

中田、全力で走って来る。その背後から、車は急加速して近づいて来る。

中田、ひかれる寸前に横に避けて地面に倒れ込む。

車はそのまま突き進む。

自転車に乗った人をはねる音が響き、電柱とぶつかる音が響き渡る。

○駐車場の前の通路(夜)

電柱と衝突して潰れている車。

良平、車の運転席から足をふらつかせながら降りて来る。

目の前には、倒れている自転車と50代の男が血まみれになって倒れている。

良平、50代の男をじっと見る。

良平「そうか。カズ子は雄介を殺害できなかったとしても、怒りを形にして行動する事で穏やかな心を取り戻したんだ。それは過去の自分との別れの作業だ。問題は、雄介の言葉にある。となれば、佐山との逃亡生活は、逮捕されるまでの間という、限られた人生最大の幸福の時間になる」

と、笑みを浮かべる。

良平「カズ子はあの時、父親にもらったエルメスの腕時計を排水溝に投げ捨てているはずだ。それが全てを諦める儀式であり、同時に二度と後戻りはしないという覚悟を決めた自分への意思表示だ」

と、車を見る。
良平「最高のエンディングだ！」
と、笑みを浮かべる。
中田、その背後でゆっくりと立ち上がると、落ちているブロックを両手で持ち上げ、ゆっくりと良平の元に歩く。
良平「佐山さん、全部雄介さんが悪いの。そうだねカズ子さん。佐山さん本当にそう思う？もちろんさ。佐山さん、じゃあ、警察が来る前に、一緒にあの世に行ってくれるわね。まっ、待ってカズ子さん！」
中田の声「佐山さん」
良平、振り返る。
中田、両手で持ち上げている、ブロックを、良平の頭に叩きつける。
良平、地面に倒れ、額から血を流す。
良平「だっ……誰なんだ？誰がこんな事を？」
と、中田を見上げる。
良平「きっ、君は一体……誰なんだ⁉」
中田、ブロックを振り上げて落とす。

田
渕
靖
章